

「四人組」批判と華国鋒体制の確立

藤 井 満洲男

は じ め に

1976年も暮れようとする12月25日、華国鋒主席は「農業は大寨に学ぶ」第2回全国会議における講話で、76年の闘争を回顧し、この年は、中国共産党の歴史においても、中国のプロレタリア独裁の歴史においても、「まことになみなみならぬ1年であった」と述べた。それは中国の党、軍、人民にとって厳しい試煉の年であり、また偉大な歴史的勝利の年でもあった。10月7日の決定的な闘争において、華主席をいただく党中央は果敢な措置をとり、王洪文・張春橋・江青・姚文元ら「四人組」（原語では「四人幫」）反党グループの、党と国家権力を乗っとうとした陰謀を粉碎して、中国が引きつづき、毛主席が指し示した方向に沿ってプロレタリア革命事業を前進させることを保証したのである。

波瀾にみちた76年の政治動向を概観することは、容易でない。路線闘争の全面的な経過についても、闘争の個々の局面の具体的な様相についても、われわれが利用しうる確実な資料はまだ限られている。以下は、大体77年1月末までに公表された事実をあらまし整理し、いわば暫定的に、できるだけ主観を加えず記述したものである。

昨年は中国の人民、世界の革命的人民が、悲痛な損失をこうむった年であった。9月9日、中国共産党と中国人民を指導して半世紀に余る奮闘を続けた毛沢東主席が逝去した。これにさきだち毛主席の終生の戦友周恩来総理は1月7日、朱徳委員長は7月6日あいついで世を去った。前の年

の75年12月16日には康生副主席が、4月2日には董必武副委員長が逝去した。華主席がさきの講話で述べたように、「こんなに短い間にこんなに多くの、人民のなかで崇高な威信をもつ偉大なプロレタリア革命家があいついで逝去したことは、確かに、党中央の指導に、きわめて大きな困難をもたらした」のである。

さらに加えて、この年中国ははげしい自然災害に見舞われた。一部の地区での干害、水害、冷害、霜害などがかなりひどかった上に、ビルマとの国境に近い雲南省の竜陵、河北省の唐山・豊南、四川省北部の松潘などの地区で、マグニチュード7以上の強烈な地震が6回も起きた。華主席は、特に、7月28日の唐山・豊南一帯の地震による「人民の生命と財産との損失は、史上まれに見るものであった」といっている。

「四人組」反党グループは、ほかならぬこういう党と人民の深刻な困難につけこみ、一挙に党と国家の最高指導権を奪い取ろうとした。華主席はいう、「われわれは党が修正主義化し、国が変質し、資本主義が復活するという非常に現実的な危険にさらされ、中国の上空には暗雲がたれこめたのである。こうした重大な局面は、建国以来かつてなかったことであり、党の創立以来まれに見るものである」。だからこそいま中国の人民大衆は、今回の「四人組」反党グループ粉碎の勝利を、遠く35年1月、毛主席の全党に対する指導的地位が確立された遵義会議のそれに比しているのである。

(一)「四人組」の素性

今回の勝利の意義を明らかにするためには、一応過去にさかのぼって「四人組」反党グループの形成と発展のあとをたどる必要がある。

「四人組」の共通特徴は、偉大なプロレタリア文化大革命の渦中にまぎれこんで、党と人民を欺き、「左派」、「革命派」、「文革のチャンピオン」、「革命路線の旗手」などの虚名を博し、これを資本として久しく横行をほしいままにしていたことである。だがその正体を洗って見れば、張春橋、江青、姚文元は、みな国民党反動派とつながりのあった歴史上の反革命分子が、いまあらたな条件のもとで現行の反革命分子となり果てたものであり、王洪文はまた、プロレタリア独裁のもとで新たに生まれたブルジョアジーの典型的な代表であり、結局「四人組」とは、こういう新旧の反革命分子が構成する反革命の徒党であった。

張、江、姚の醜い30年代

「四人組」が粉碎されてから、あいついで世に出た資料によれば、張春橋は34年10月上海の雑誌『中学生』に、「済南」と題する文章を書き、日本と「提携」しての「共存共栄」によって済南を建設するという民族裏切り者の主張を吐いた（于翔「漢奸売国奴の醜い面がまえ」『人民日報』76, 12, 19）。30年代なかばの張春橋は、王明、周揚らの、抗日民族統一戦線の指導権を国民党反動派の手に委ねようとする右翼投降主義路線の追随者であり、この立場から、重病に苦しみながら毛主席の革命路線を奉じていた魯迅に対する迫害、包圍攻撃にひと役を買った（任平「正真正銘の古くからの投降派」『北京周報』76年第44号）。その後延安に移ってからも、張春橋はなお、38年3月裏切り者丁玲を編集長として国民党支配下の漢口で刊行された雑誌『戦地』に、人民の軍隊をすべて

蒋介石に引き渡すことを主張する投降主義の論文を寄稿した（衛今「蒋介石のつゆ払い——張春橋」『人民日報』76, 11, 13）。「30年代の進歩的芸術活動家」と自称した江青の当時の行動の醜さも張春橋に劣らない。当時藍蘋と名乗っていた江青は、右翼投降主義路線の文学・芸術部面の現れである「国防文学」、「国防演劇」、「国防映画」に熱中し、36年9月には、蒋介石の満50歳の誕生日を祝い、飛行機を献納するための映画界「遊芸大会」に積極的に参加し、11月には「国防映画」『狼山喋血記』に出演して国民党反動派の中央機関紙『中央日報』の賞讃を博した（魯迅研究室「三十年代三度にわたる江青の反革命演出」『人民日報』76, 11, 19）。姚文元はまた、33年丁玲らとともに逮捕されてたちまち「転向」し、共産党を離脱する宣言を発表して出獄した「作家」姚蓬子の子であった（周雷「蓬子の転向とこの文筆ゴロの手紙の差し抑さえ」『人民日報』77, 1, 13）。

政治的カメレオン張、姚の50年代

解放後も、50年代に現れた張春橋、姚文元の言動の記録は決して清らかではない。資本主義商業の社会主義改造が勝利のうちに進行しつつあった56年、張春橋が発表した「自己の運命を賞握している人びと」という文章は、改造の対象となった資本家たちの創業の艱苦をたたえ、かれらが改造を受け入れるにいたったのは、かれらに遠見があり、「自己の運命を賞握しているからだ」と、正面から階級融和論を説いたものであった（林清源・李振王「資本家のやせ犬の供述」『人民日報』76, 12, 19）。姚文元が57年2月、右派分子艾青と並んで発表した文章は、「文学批評家は、死んだ公式から自らを解放してこそ作品のなかの天才的なひらめきを察知することができる」という当時のブルジョアジー右派の典型的な主張を盛っていたし、その後の評論活動のなかでも、かれはもっぱら地主・ブルジョアジーの人間性論の見地に立って、元曲家馬致遠をたたえ、投降主義の作品『

水滸伝』を「不朽の悲劇」と認め、ブルジョアジエを賛美する周立波の小説「上海の朝」を「優秀な作品」と評価した。この同じ姚文元は、翌57年ブルジョアジー右派に対する反撃がはじまると、たちまち艾青に対する激越な批判者のひとりとなった。手のひらをかえすようなこの二面派ぶりを、現在姚文元を批判する人びとはカメレオンにたとえる（梁仲華「カメレオンの経歴一瞥」『人民日報』77, 1, 19）。しかもかれは、この年12月に発表した「馮雪峰のブルジョア的文学・芸術路線の思想的基礎」という論文では、ブルジョアジー右派の進攻を撃退したことによって、今後資本主義の路線が、社会主義の文学・芸術路線と指導権を争うなどということは永久に不可能となったと、露骨な階級闘争「終結」論を宣伝する始末である（解勝文「姚文元の階級闘争“終結”論を批判する」『人民日報』77, 1, 16）。58年1月姚文元が発表した「銭谷融先生の“人道主義”論を評す」という文章は、まぎれもない孔子崇拜の論調にみちており（邢福石「尊孔派——姚文元」『人民日報』76, 11, 20）、またかれがこの年に書いたある文章は、翌年右翼日和見主義路線の頭目としての面目を暴露された彭德懷を、あらん限りの形容詞を使って詆歌したものであった（北京師範大学中文系批判組「昔からの右派——姚文元」『人民日報』77, 2, 7）。かれが59年1冊の書物にまとめた『魯迅——中国文化革命の巨人』（邦訳がある）は、魯迅の前期の思想と創作については裏切り者瞿秋白の見解を採用し、後期についてはおなじく裏切り者王明、ひいては周揚の見解に導かれるという代物であった。したがって57年夏、周揚らが30年代のふたつの路線の闘争史を偽造し、魯迅を誣いようとした当時には、姚文元もその尻馬に乗って、魯迅は当時「情況に通じないで」、「上海文学芸術界の地下党に打撃を加える反党活動」に加わったとさえ罵ったのである（甘競存「典型的な反革命二面派——姚文元」『人民日報』76, 11,

26）。

文革と張、江、姚

以上、やや煩わしいまでに張春橋、姚文元らの50年代における言動の例を挙げたのは、かれらが、その自任したような「一貫して正しい」「造反派」「反潮流の戦士」などではさらさらなく、ブルジョア世界観と反革命修正主義路線にどっぷりとつかりながら、ただ時流に敏感に反応し、絶えず面貌を転換して行く文筆ゴロ、政治的カメレオンだということを示すためであった。プロレタリア文化大革命のような規模壮大な大衆運動にあっては、そのなかに雑多な不純な要素がまぎれこむことは避けられない。上海の文化・宣伝部門にいた張春橋、姚文元が、文化大革命のなかで、江青をいただき、さらに労働者造反派の若い「指導者」王洪文と結んで、「左派」としての虚名をかちとるまでの経過はまだ充分にあきらかではない。現在かれらに加えられている批判から帰納されることは、かれらが実は林彪、陳伯達とひとつ穴のむじなだったということである。前にも引いた華主席の講話にもあるように、文化大革命は、「毛主席みずからの指導のもとに、劉少奇、林彪のふたつのブルジョア司令部を粉碎するという偉大な勝利をおさめ、党が広範な人民大衆に直接依拠して党内の走資派にうち勝つ面で、ゆたかな経験をつんだ」。だがこの達成のかげに、若干の、後遺症をともしう副作用が生じたことは否めない。だが現在から振りかえれば、こうした副作用の大部分が、林彪、陳伯達と結んだ「四人組」が引き起こしたものだったということも、次第に明らかになってくるようだ。

副作用の主なもののひとつは、かれらが大衆のあいだにブルジョア的派閥性をあおり、「武闘」を挑発した結果ひき起こされた「全面的な内戦」の風潮であった。「文闘」を旨とし、「武闘」を戒めることは毛主席がくりかえし強調し、66年8月の中共中央の「プロレタリア文化大革命についての決定」にも明確に規定されていた。しかし、

67年江青が唱えた「文攻武衛」という怪しげなスローガンは、一挙に「武闘」を「合法化」する役割を果たし、全国の各地にわたって人命と物資、施設の重大な損害を招いた。副作用のいまひとつは、かれらが、「一切を疑い、一切を打倒する」風潮を煽り、打撃の対象をむやみに拡大し、特に鉾先を周総理をはじめとする毛主席の老戦友、歴戦の老革命家たちに向けて、いわれのない攻撃を加えたことである。「四人組」と林彪一派は、文化大革命の初期、周総理が掌握している国家機構を「旧政府」と呼び、「徹底的にプロレタリア独裁を改善しよう」という反動的なスローガンを提出し、「五一六」兵団と号する反革命陰謀グループをけしかけて、あるときは連続18時間にわたり周総理を囲んで迫害を加えた。プロレタリア独裁の柱石としての人民解放軍に対しても、「軍内のひと握りをつまみ出せ」というスローガンのもとに、軍隊を分裂させ、プロレタリア独裁の柱石をゆるがせようとする策動がおこなわれたが、これを操ったのもやはり「四人組」と林彪らであった。林彪らの陰謀が暴露され、そのブルジョア司令部が打倒されたとき、「四人組」はいち早く身をひるがえして、林彪、陳伯達と無関係だということを装い、必要とあれば偽りの「自己批判」をおこなうことも辞さなかった (Jack Chen, *Inside the Cultural Revolution*, 1975. P. 371)。

「文革の功臣」を以て任じた「四人組」が、直接文化大革命を攪乱する上で果たした役割は大体こういうものであった。またかれらが自己の功績として大いに宣伝したもののうち、たとえば京劇革命をとって見よう。「四人組」は江青が京劇革命を発動し、指導したと恥知らずな法螺を吹いた。しかし『延安の文学・芸術座談会における講話』にさかのぼるまでもなく、44年の「延安京劇院に与えた手紙」から、63年、64年の重要指示にいたるまで、京劇革命の準備、発足、展開は、すべて毛主席の直接の指導のもとに進められた。旧式劇

に陶醉していた江青が京劇革命に口を挟みはじめたのは、64年京劇革命がすでに偉大な成果を生みはじめてからのことである。8つの革命模範劇も、無数の演劇活動家が、毛主席の文学・芸術路線に導かれて生み出したものであり、江青はただその功を盗んでおのれのものとしたに過ぎない。そのためには江青は、こういう模範劇にはそれぞれ原作があり、改編を重ねて現状にいたったものであることさえ隠そうとし、ついには原作者に対し政治的迫害を加えることをさえ敢てしてたといわれる (人民文学出版社批判組「世を欺き名をかたるスリの政治屋——江青」『人民日報』76, 11, 22)。

(二)「四人組」の反党活動と毛主席の批判

「四人組」が徒党を組み、党と国家の最高指導権を奪おうとする徴候がようやく明らかになってきたのは、73年8月の中国共産党第10回大会以後のことだといわれる。大会直後の中央委員会総会で、王洪文は一躍党中央副主席となり、張春橋は中央政治局常務委員、江青、姚文元は中央政治局委員の職務についた。かれらはその野望実現の手はじめとして、74年の批林批孔運動の攪乱にとりかかった。

批林批孔を攪乱する「四人組」

73年9月、かれらは中央政治局の討論も経ないうちに孔子批判の問題をとりあげ、その腹心に批孔座談会なるものを開かせ、批林・批孔とともに、高級指導者のあいだにその子弟の「裏口」入学や「裏口」入隊が行われていると称し、こういう「不正の風」も批判の対象として取り上げることが提唱した。批林批孔の闘争が正式に党中央によって取り上げられたのち、74年1月「四人組」は毛主席、中央政治局の同意も得ないで、党中央軍事委員会、党中央直属機関および国家機関に動員大

会を開かせ、江青らがこもごも立って、批林を語らず批孔を語らず、「不正の風」批判に名を借りて、闘争の鋒先をもっぱら党、政府、軍の高級指導者に向けるよう煽動し、1月25日の大会では周総理に態度の表明を迫り、総理に不意打ちを食わせたと言った。かれらのこういう言動に対し、毛主席は同年2月15日、「現在、形而上学つまり一面性がはびこっている。批林批孔に、さらに裏口入りをまじえるのは、批林批孔を弱める可能性がある」（総参謀部通信部大批判組「『三本の矢を同時に発する』意図は党と国の権力を奪うことにある」『人民日報』77, 1, 17)という批判を加えた。批林批孔が解決しなければならないのは敵・味方の矛盾の問題であり、「四人組」が騒ぎ立てる「裏口入り」の問題は人民内部の矛盾に属していたからである。この年3月20日面会を要求した江青に対し毛主席は、「会わない方がましである。これまで長年きみに話してきたが、きみは多くのことを実行していない。何度会ったところで何の役に立とう。マルクス・レーニンの本があり、私の本があるのに、君はすこしも研究していない」と怒りをこめて書き送った（雑誌『紅旗』評論員「マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの著作と毛主席の著作を学習するあらたな高まりを起こそう」『北京周報』76年第52号22ページ）。毛主席のきびしい批判に遭って失敗した「四人組」は、6月以降は「法家の評論と儒家の批判」に名を借りて、鋒先を周総理へ向け、「党内の大儒」に対する攻撃を煽った。7月17日毛主席はまたも「四人組」に対し、「きみたちは注意すべきだ。4人の小派閥に固まってしまうてはいけない」と鋭く警告した。（『人民日報』・雑誌『紅旗』・『解放軍報』社説「偉大な歴史的勝利」、『北京周報』76年第44号17ページ）。

第4期全国人民代表大会第1回会議の準備が進められていた74年の秋から冬、「四人組」は「組閣」の時機至れりとばかり陰謀活動を強化した。

王洪文は中央政治局の目を盗んで毛主席を訪れ、周総理に対する誣告を行なったが、毛主席の厳しい叱責を受けた。11月から12月にかけて毛主席は、今や明確に、「江青には野心がある。王洪文を委員長とし、自分自身は党の主席になるつもりでいる」と人に告げ（同上17ページ）、江青に対しては、「君もなかなか改めないものだ」と語った（『人民日報』社説「『四人組』のねらいの中心は党と国家権力のさん奪にある」、『北京周報』77年第3号26ページ）。12月14日毛主席はあらためて「四人組」に対し、「派閥をつくってはならない。派閥をつくればきっとつまずく」と警告した（『人民日報』・雑誌『紅旗』・『解放軍報』社説前掲『北京周報』76年第44号17ページ）。

プロレタリア独裁理論学習運動と「四人組」

「組閣」の陰謀に挫折した「四人組」は、74年12月の毛主席の「理論問題についての重要指示」に基づき、75年に入って展開されはじめたプロレタリア独裁理論学習運動の攪乱に全力をあげた。かれらは、当面の主要な危険は経験主義であると主張し、学習運動のなかでは経験主義に対する反対を「カナメにすえる」ことを要求した。『紅旗』の75年3月号に発表された姚文元の反党論文「林彪反党グループの社会的基礎を論ず」から、3月はじめの軍内部の会議における張春橋の発言、その他江青の一部の工場における発言にいたるまではすべて、経験主義反対を名として反革命の世論づくりを目指すものであった。経験主義反対を「カナメとする」ことは、実際の経験の豊富な革命的老幹部、中年・青年幹部を片っぴしから打倒して、結局は党と国家の最高指導権を乗っとうとする陰謀の布石のひとつであった。だがこの策動もまたただちに毛主席の痛烈な批判を浴びた。4月23日、毛主席はある報告書に対して指示を加え、「四人組」の誤りを批判して、「提起のしかたは、修正主義反対であるべきだと思われる。ここには、経験主義反対も、教条主義反対も含まれる。両者

は、ともにマルクス・レーニン主義を修正するものである。一方だけを取りあげて、他方を見逃すようではいけない」と指摘し、「わたしの見るところ、経験主義を批判する人自身、経験主義におちいつている」とつけ加えた上で（『人民日報』社説「『四人組』を徹底的に摘発、批判しよう」、『北京周報』76年第49号9ページ）、さらに、「わが党には、ほんとうにマルクス・レーニン主義を理解しているものは多くない。一部の人は、自分で理解していると思いこんでいるが、その実、さほど理解してはいない。そのくせ、自分が正しいと思って、何かというと人を叱責する。これもマルクス・レーニン主義を理解していない証拠である」と述べた（解正「党を乗っとり国家権力を奪取する黒い綱領」『北京周報』76年第50号16ページ）。

毛主席のきびしい批判を受けながら、「四人組」はその策動をやめなかった。毛主席はついにかれらの徒党を正面から「四人組」と呼んだ。この年5月3日毛主席はかれらに対し、あらためて「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」を説ききかせ、「四人組をつくってはいけない。きみたちはもうやめることだ。なぜいまだに続けるのか。なぜ二百余人の中央委員と団結しないのか。少数のものが固まるのはよくない。もともとよくないことである」と指摘した（『人民日報』社説同上、『北京周報』76年第49号9ページ）。同じ日毛主席は「四人組」の問題について、つぎのような厳しい決意と戦略的段取りを明らかにした。「今年の前半に解決できなければ後半に解決する。今年解決できなければ来年解決する。来年解決できなければさ来年解決する」（『人民日報』・雑誌『紅旗』・『解放軍報』社説前掲、『北京周報』76年第44号17ページ）。

毛主席のあいつく批判

75年中を通じ、毛主席は党中央を率いて、「四人組」に対する批判と闘争とを続けた。英雄的な大慶労働者の闘争を描いた映画「創業」に対し、

「工業は大慶に学ぶ」運動を敵視する「四人組」が、「十大罪状」を挙げて迫害を加えたことについて、毛主席は、「この映画には大きな誤りはない。上映を許可するよう提案する。完全無欠を求めるのはよくない。しかも罪名が10カ条もあるのはあまりにも行き過ぎであり、党内の文芸政策を調整するのに不利である」と正面から批判を加えた（任平「輝かしい歴史的文書」『北京周報』76年第47号16ページ）。また9月15日「農業は大寨に学ぶ」全国会議の開幕式に現われ江青は、日程を無視して立ち上がり、支離滅裂な演説をし、さらに会議の基調をねじ曲げ、運動の銚先を毛主席、周総理以下の中央の指導者に向けるため、その『水滸伝』論評の発言草稿なるものを大会で配布するよう要求した。76年末の「農業は大寨に学ぶ」第2回全国会議での陳永貴副総理の報告によれば、当日会議を司会していた華国鋒副総理が指示を仰いだのにこたえた毛主席は、「何をほざく、中味が看板と違うではないか」と江青の発言を厳しく批判し、「原稿を配布してはならない、録音を流してはならない、発言を印刷してはならない」と明確に指示してその陰謀を粉碎した（『北京周報』77年第2号9ページ）。

「四人組」の野望と策動とは、毛主席をいただく党中央の高級指導者の目には今や全く明らかとなり、「四人組」問題の解決は、すでに党の戦略日程に載っていたといえる。だが「四人組」の粉碎が実現するまでには、76年に入ってさらに10月にいたるまでの、苦難にみちた路線闘争、党中央にひきいられる全党、全軍、全国人民の、「四人組」反党グループとの激烈な階級闘争を経なければならなかった。さきに引いた華主席の講話からもうかがわれるように、この闘争の重大性と危険性は、武装クーデターの企てに失敗して自滅した林彪反党グループとの闘争などとは、くらべものにならない切迫したものだったのである。

(三)10月までの激烈な政治闘争

鄧小平問題をめぐる闘争

76年の元旦、毛主席の「詞二首」が発表され、「世に難きことなし、只肯えて登攀するを要するのみ」という豪邁な詞句は、全中国の人心を奮起させた。だが一方では、75年の恐らく10月ごろから「右からの巻き返しの風潮」に反撃する闘争が進行しつつあった。この闘争が、実質においては当時の鄧小平副主席に対する批判であったことはいうまでもない。いわゆる鄧小平問題の内容は「四人組」の陰謀が粉碎された現在でも、まだ充分に明らかにされていない。きわめて暫定的にいえるのは、75年の7、8、9月を中心とするある期間特に「四人組」策動との対立が激化するなかで、鄧小平氏が示した言動には重要なあやまりが露呈されており、このことが一部に、プロレタリア文化大革命そのものの意義と成果に疑いをいだく「右からの巻き返しの風潮」を呼び起こす契機になったということである。鄧小平氏に対する批判が、もともとは毛主席の指示によって引き起こされたものだということはほぼ疑いない。しかしその後の運動の展開のなかで、「四人組」の支配する宣伝メディアがあいついで載せた鄧小平問題に関する毛主席のいくつかの指示は、「四人組」の陰謀が粉碎されたのちには再確認されていない。また鄧小平氏批判にあたって主な材料となった「三株の毒草」、つまり「全党全国の諸活動の総綱について」、「工業発展を速めることについての若干の問題」、「科学院の活動報告提綱」にしても、そのうちに含まれる誤りの分量、程度は明らかでなく、その誤りの混入に鄧小平氏がどの程度関与していたかも定かでない。いずれにしても、この批判を進めるにあたっての毛主席、党中央の方針は、当初から、運動を党の一元的な指導のもとに

置くこと、革命的交流をおこなったり、戦闘隊をつくったりしてはならないことにあり、鄧小平氏に対する批判はあくまでも人民内部の矛盾を解決する問題と考えられていた。しかし「四人組」は、鄧小平氏批判に名を借りて、全く別個の策動、つまり党と国家の最高指導権を奪うために、毛主席のプロレタリア革命路線に忠実な周総理をはじめ、久しい革命闘争の試練に堪えた老指導者、プロレタリア文化大革命のなかから、またその後に輩出し、「四人組」の意に従おうとしない中年、青年の指導者をなぎ倒し、これに取ってかわろうとする策動を、狂ったように押し進めたのである。

周総理の死去と「四人組」の失敗

1月8日周総理の逝去に遭った中国の人民は、故総理の声望を傷けるためには、広範な人民の心からの哀悼の意の発露さえ抑えようとする「四人組」の策動に対し、深刻な疑惑をいだいた。75年の全国人民代表大会当時「組閣」に失敗した「四人組」は、周総理の死去に際して、機至れりとばかり勇み立った。「四人組」が多年その「根拠地」としていた上海には、張春橋を総理にと喚き立てる大字報が現れた（文化部批判組「『走資派と闘う作品を作れ』とぶつ『四人組』の反動的な実質」『人民日報』76,11,23）。だがここでまたもやかれらの野望実現の前に厳然と立ち塞がったのは毛主席であった。1月中旬に毛主席は、本来序列の上からいえば6番目の副総理であった華国鋒氏を國務院総理代理に任命すること、同時に同氏に党中央政治局の仕事を主宰させることを提議した（『人民日報』社説『「四人組」のねらいの中心は党と国家権力のさん奪にある』、『北京周報』77年第3号27ページ）。「四人組」は、これまで主として周総理に向けていた攻撃の鋒先を華国鋒氏に向け、さらにこの決定をもたらした毛主席以下の党の最高指導者たちに向けた。2月24日の『人民日報』に載った北京大学・清華大学大批判組「ふたたび孔丘その人について」は、孔丘は56歳で司寇

(今の公安部長にあたる)から魯国の宰相代理に任ぜられたと特筆大書して、華国鋒氏に露骨きわるあてこすりを加えた。上にも引いた陳永貴副総理の12月20日の報告によれば、76年2月、鄧小平批判に関する説明会で華国鋒氏がおこなった談話は、中央政治局で討論・採択され、毛主席の同意を得た。この談話は、批判は各レベルの党委員会の一元的指導のもとに行うべきであり、各レベルにわたっていわゆる鄧小平の代理人なるものを摘発してはならないということを強調しており、中央と地方の党、政府、軍の多くの指導者を打倒しようとする「四人組」の策動にとってはまことに大きな障害となった。江青はこれに対抗するため、2月から3月にかけて2回にわたり、ひそかにいくつかの省市の責任者を召集して談話をおこなった。毛主席はこれを知って、「江青は干渉し過ぎる。単独で12の省の責任者を召集して話をした」と憤り、ただちに人をやって華国鋒氏に、江青の話は誤っていると伝えさせた(『人民日報』編集部「滅亡寸前の狂気のあがき」『北京周報』76年第52号13ページ)。

天安門事件と「四人組」の再度の失敗

76年4月5日北京の天安門広場で起こったいわゆる反革命政治事件を、「四人組」が打倒された現在、結局どう評価すべきかについても、今のところ確実な資料はない。ただ、清明節を機会に、周総理の遺徳を慕う数十万の大衆が、期せずして人民英雄記念碑のある天安門広場に集まったこと、これらの大衆が、周総理に対する追悼活動が抑圧されていることについて、多かれ少かれ不満と憤りをいだいていたこと、同時にまたこの大衆の間に、新旧の雑多な反革命分子、社会のクズがまぎれこみ、殴打や、放火・略奪をおこなったことだけは暫定的に認めておいてもよからうと思う。だが当時の政治情勢全体を考慮すれば、こういう暴行に出たもののなかには、毛主席、華総理代理に反対し、党中央に反対して、これに政治的な痛手

を負わせようとする「四人組」の手先、「五一六」兵団の残党その他が大いに混入しており、むしろ暴徒の基調を形成していたとしても不思議はない。だがこの事件の結末は、正に「四人組」を絶望的な最後のあがきに駆り立てるのに十分なものとなった。

4月7日党中央政治局は、毛主席の提案に基づき、鄧小平氏の党内外のすべての職務を解いたが、その党籍は保留した。同時に政治局は、華国鋒氏を党中央第一副主席、国務院総理に任命することを決定した。中国共産党がかつて置いたことのない第一副主席の職を設け、これに華国鋒氏をあてたのは、毛主席が今や華国鋒氏を後継者として選ぶにいたったことを明白に示すものであった。毛主席は、この直後「世論をつくって華国鋒同志を宣伝し、全国人民が漸次華国鋒同志を知るようにしなければならない」と指示したが(『人民日報』社説前掲、『北京周報』77年第3号27ページ)、「四人組」の支配する宣伝メディアが、この指示の実行を怠ったことはいうまでもない。

「四人組」各地で混乱を引き起こす

陳永貴副総理のさきに引いた報告その他の資料はつぎのように述べている。「四人組」は鄧小平批判に便乗して、「工業、農業、商業各部門、軍隊を直撃してはならない」という毛主席の明確な指示に背き、そのひと握りの腹心を通じて一部のものを煽りたて、これと連絡をとり、党の系統のほかに「鄧小平批判事務室」などの系統を勝手に打ち立て、いたるところに戦闘隊をつくり、「あやまった路線のためには生産しない」という怪しげな論調をまき散らして各地に混乱をまき起こした。このため一部の地方では、党、政府の機関は機能が麻痺し、鉱工業企業には生産の減退や停止が起こり、商業、交通運輸にも停頓が生まれ、時には武闘さえも見られるようになった。「一部の地方では資本主義が復活し、妖怪変化がぞろぞろと飛び出してきて、狂ったように党を攻撃した」

(『北京周報』77年第2号10ページ)。こういう状況はこの年の夏から秋にかけてますます悪化し、地震その他の災害とあいまって、中国の経済と人民の生活に重大な脅威をもたらしたが、この状況については全面的な資料が乏しいため、ここではこれ以上立ち入らない。ただ念のため、77年に入ってから、西側の報道が伝えた中国各地、特に杭州、保定、鄭州などにおけるいわゆる混乱は、実はすべてこの時期、つまり「四人組」の陰謀が粉碎される以前の時期に属するものだということをつけ加えておく。

毛主席の華国鋒氏支持と「四人組」の反抗

76年4月30日、毛主席のマルドーン・ニュージールランド首相との会見に同席した華国鋒氏は、会見が終ったのち、いくつかの省の情勢がよくないことを報告した。毛主席はその場で、「ゆっくりやることだ、気を揉むことはない」、「これまでの方針通りに事を運ぶよう」、「あなたがやれば、私は安心だ」という3句を記して華国鋒氏に与えた(『人民日報』編集部前掲、『北京周報』76年第52号9～10ページ)。はじめの2句の意味は、いうまでもなく、各省の問題を解決するにあたっては、「これまでの方針」つまり毛主席の一連の指示と華国鋒氏の2月25日の談話に現れた方針に基づいて事を運ぶということであった。第3句が毛主席の後継者に対する無限の信頼を示すものであったことはいうまでもない。

「四人組」は華総理に対する直接の攻撃を続けた。7月中央が開いた全国計画活動座談会の席で、「四人組」は何人かの手先を使い、鄧小平批判に名をかりて計画的に、「国務院は右からの巻き返しの策源地だ」と叫び、華総理その他の中央の指導者を攻撃させた。華国鋒氏はこの席で毛主席の「これまでの方針通りに事を運ぶよう」という指示を伝え、これに的確な説明を加えて、この進攻を撃退した。中央での、公式の場面でのかれらの策動は、病中の毛主席、華第一副主席をいただく

中央、高級指導者の団結の前にあいついで挫折したが、毛主席、党中央の目を盗んでの陰謀活動はますます激しさを加えた。「四人組」はかれらのあいだでひそかに党、政府、軍の重要問題に関する資料を回覧し、密議を重ねた。かれらはそれぞれ手中に握っていた権力を利用して、むやみに文書を批准し指示を乱発して、中央機関の一部に圧力をかけた。たとえば石油輸出政策は毛主席がみずから定めたものであるにもかかわらず、かれらはこれを「資源の売り渡し」だと非難し、あきらかに毛主席が同意したプラント類の輸入も、これを「外国崇拜哲学」だとして攻撃した。江青は毛主席の病中をも顧みず、8月には天津市の小靳莊大隊に現れ、9月には大寨大隊に入りこんだ。小靳莊は、かねて大寨の赤旗を敵視していた江青が、個人の政治的資本に変えるためその成果をかすめ取っていた地点である。6、7、8の3カ月、党と国家の最高指導権を狙う「四人組」の反革命活動のテンポは、ますます速度を加えた。

毛主席の逝去と「四人組」の最後のあがき

9月9日午前0時10分、中国人民の偉大な領袖、世界の革命人民の偉大な教師毛沢東主席は北京で逝去した。即日公布された中共中央、全国人民代表大会常務委員会、国務院、中共中央軍事委員会の「全党、全軍、全国各民族人民に告ぐる書」は、全国を深い悲しみにおとし入れた。9月18日北京100万の人民が参加して厳かに举行された追悼大会では、中共中央第一副主席、国務院総理として、華国鋒氏が追悼の辞を読みあげた。中国の人民が深い悲しみを力に変え、党中央の指導のもとに毛主席のプロレタリア革命路線を堅持し、社会主義の道を引きつづき前進しようという決意を固めていたとき、追悼大会の席に列になっていた「四人組」は、早くも猛然と権力奪取の兇悪な手配を進めつつあったのである。

かれらが打った最初の手は、各省、直轄市、自治区の党委員会に対する党中央の指導権を乗っと

ろうとしたことである。王洪文らは党中央弁公庁の名をかたり、全国各地に対し、重大な問題は迅速にかれらに報告して指示を仰ぐよう通達を發し、華国鋒氏をいただく党中央と地方との連絡を断ち、かれらの指令で全国を動かそうとした。9月12日以降姚文元と「四人組」が北京大学・清華大学に配置していた腹心らは、江青に対する忠誠を表明する上申書をかき集める段取りを進め、こういう腹心のあいだから、毛主席の生前の布石に公然と反対し、江青が党中央主席、中央軍事委員会主席に就任するよう「要請」する声があがった。

「四人組」は、毛主席が4月華国鋒氏に与えた「これまでの方針通りに事を運ぶよう」（「照過去方針辦」）という指示を、「既定の方針に従って事を運ぶように」（「按既定方辦」）の形に改め、これを毛主席の臨終にあたっての遺囑だとし、9月16日以降あらゆるメディアを通じて大々的に宣伝しはじめた。この奇怪な行動の目的のひとつは、かれらのみが臨終にあたっての遺囑を支持し、宣伝しており、9月18日の追悼の辞にこれを取り入れなかった華国鋒氏と党中央はこの遺囑に反対し、包み隠しているという印象をつくり出し、華国鋒氏以下の中央の指導者を傷つけ、打ち倒す材料とするためであった。10月2日華国鋒氏は、ある文書の審査にあたり、「既定の方針に従って事を運ぶように」という字句を削除し、「毛主席が書き、私が政治局で伝達したものは『これまでの方針通りに事を運ぶよう』となっている」と指摘して、「四人組」の偽造をあばいた。「四人組」は10月4日の『光明日報』に反党論文を發表し、毛主席の「既定方針」に文句をつけるものは、「修正主義」の頭目であり、「決してよい末路はない」と、正面から華国鋒氏を攻撃して、反革命行動の信号弾を打ち上げた。「四人組」は権力奪取が間近に迫ったものと情勢を誤認して、正に有頂天になっていた。張春橋が書いた国家権力奪取の大綱には、「どのように権力を強化するか、

殺人」という一句があった。かれらは華国鋒氏をいただく党中央と、多数の党、政府、軍の指導者を、「ひとりひとり片づけよう」としていたのである。

（四）「四人組」の覆滅と 華国鋒体制の確立

「四人組」の反革命陰謀の粉碎

10月7日、華国鋒をはじめ党中央指導者の果断によって、党中央政治局會議の席上「四人組」、反党グループの反革命陰謀は粉碎され、華国鋒氏が、毛主席の生前の意図に則して党中央主席、中央軍事委員会主席に任命された。翌8日づいで、中共中央、全国人民代表大会常務委員会、國務院、中共中央軍事委員会の「偉大な指導者、教師毛沢東主席の記念堂を建てることについての決定」、中共中央の「『毛沢東選集』出版および『毛沢東全集』出版準備についての決定」が公布された。

「四人組」の陰謀の粉碎は、華主席がのちに12月25日の講話で述べたように、「党中央が命令を發するや、広範な大衆は奮起してこれにこたえ、すぐさま行動をおこし、一発の銃弾も打たず、一滴の血も流さずに問題を解決した」（『北京周報』77年第1号36ページ）。76年のふたつの路線の鋭い複雑な闘争、中共の歴史における第11回目の重大な路線闘争は、華主席をいただく党中央の側のいわばパーフェクト・ゲームに終わった。この結末から証明されることは、第1に、「四人組」は、その多年の悪業を通じ、特にこの年における狂ったような策動とそれが引きおこした国民経済、人民生活の上での混乱、破局の現実を通じ、中央の高級指導者のあいだだけにとどまらず、今や広範な大衆の前にもかれらがかつてかすめ取った「左派」、「造反派」、「文革のチャンピオン」としての虚名は地に落ち、その反革命の徒党、党内ブ

ルジョアジーの典型的な代表、現に歩んでいる走資派、党内にまぎれこんだブルジョア陰謀家、野心家としての面目が暴露されつくしていたということである。この意味からいえば、かれらを首尾よく打倒するためには、76年、特に直接その覆滅にいたるまでの半年間、かれらを充分に「踊らせる」ことが必要であったということもできよう。「四人組」は全く大衆の人気を失ったのである。華国鋒氏の主席就任についての党中央の決定が広く知れわたって行くにつれて、北京では3日間で580万、「四人組」がその「根拠地」とたのんだ上海では400余万、天津では300余万、その他各地でも大衆はかつてない規模で街頭に現れて、華主席の就任と「四人組」の打倒を祝った。北京100万の軍民が10月24日天安門広場で挙行了した祝賀大会は、全世界に対して中国人民の偉大な勝利を告げ知らせたのである。

闘争の結末から証明されたことの第2は、この闘争にあたって党中央が果敢な決断を示したことであり、特に華主席がプロレタリアートのすぐれた革命的胆略と政治的見通し、ゆたかな闘争経験と非凡な組織能力とを十二分に発輝したことである。この一挙によって、党の高級指導者から広範な幹部、広く人民大衆の華主席に対する信任はいちじるしく高められ、同時に華国鋒氏を後継者に選んだ故毛主席の、狂いのない眼識と、中国革命に対するさらにひとつの決定的な重大な貢献とに対する敬慕の念はさらに深まった。

華主席の経歴と資質

毛主席は早くから華国鋒氏の指導者としての成長の一步一步に注意を払っていた。簡単に華主席の経歴をふりかえると、華主席は山西省交城県の出身、少年時代から革命に参加し、47年秋には26歳で同省陽曲県の党委員会書記兼地方部隊政治委員となり、49年はじめ全国解放の進展に伴って南下（「毛主席の立派な学生、人民のすぐれた指導者」『人民日報』76, 12, 11）、同年8月湖南省湘

陰県に落ちつき、党委員会の初代書記となり、以後湘潭県委員会書記、湘潭地区委員会書記を歴任した。59年、右翼日和見主義分子彭德懐の進攻を粉碎した廬山会議ののち、毛主席はみずから華国鋒氏を中共湖南省委書記に任命することを提案した。毛主席は華国鋒氏の業績に常に深い注意を払い、一再ならずその活動を称賛した。プロレタリア文化大革命のなかで、周総理は華国鋒氏を湖南省革命委員会設立準備の仕事に参加させるよう特に指名し、華国鋒氏は68年4月、革命委員会成立とともに副主任のひとりとなった。69年4月の党第9回大会では中央委員に選ばれ、70年全国にさきがけて再建された党の湖南省委員会の書記となった。71年中央に移ってからは国務院総理事務室で日常活動を担任したといわれる。73年8月の党第10回大会以後中央政治局委員、75年の第4期全国人民代表大会第1次会議で国務院副総理兼公安部長に任ぜられた。華国鋒氏は異例の昇進を重ねたが、多年にわたり階級闘争、路線闘争の第一線でしっかりと毛主席の戦略配置に従って活動し、その間地方の農業、工業の生産と基本建設の面でも豊富な経験を積んだ上、中央では直接周総理の日常の指導のもとに4年近くを過ごし、国政全般についての広く、深い見識を養う機会をもったことが、華主席の革命的経歴の際だった特徴である。

毛主席の遺志の継承

「四人組」の粉碎を通じて確立されたいわゆる華国鋒体制は、毛主席の遺志を受けつぎ、マルクス主義・レーニン主義、毛沢東思想の旗を掲げて、階級闘争をカナメとし、党の基本路線を堅持し、プロレタリア独裁のもとでの継続革命を堅持し、プロレタリア独裁をうち固め、独立自主、自力更生の精神で中国を強大な社会主義国家に建設し、人類に対してより大きな貢献をするための巨歩を踏み出した。毛主席が提出し、周総理以下の党中央の指導者が遂行してきたプロレタリア革命路線は今や華主席をいただく党中央に確固として

受けつがれたのである。11月2日、中共中央、全国人民代表大会常務委員会、国務院、中共中央軍事委員会は、毛主席の逝去にあたって国外から寄せられた哀悼と弔慰の念に謝意を表するとともに、対外活動の部面でも、ゆるぎなく毛主席の革命的外交路線と政策を引きつづき実行することを宣布し、プロレタリア国際主義を堅持し、永遠に覇を称えず、永遠に超大国にならないことを誓った。11月17日中国はあらたな水爆実験に成功したが、翌18日の『人民日報』の短評は、特に先進的な技術の役割について、「われわれは世界各国が技術発展の面でたどってきた古い道に沿って、他人のあとからのろのろとついて行くべきではない。われわれは、ありきたりのやり方を打破して、できるだけ先進的技術を採用し、あまり長くない歴史的時期に、わが国を社会主義の現代化した強国にきずきあげなければならない」という故毛主席の言葉を披露した。

毛主席の記念堂を建てるという党中央の決定を実行に移すため、11月24日北京の天安門広場で記念堂の定礎式が挙行され、華主席があいさつを述べた。これもまた毛主席が切りひらいたプロレタリア革命事業を引きつづき前進させようとする中国の党と人民の決意の現れであった。11月30日から3日間第4期全国人民代表大会常務委員会第3回会議が北京の人民大会堂で開かれ、宋慶齡副委員長が司会した。会議では、華主席が党中央を代表し、鄧穎超氏を全国人民代表大会常務委員会副委員長とすることを提案した。これに基づいて会議で採択された決議によれば、この件はすでに周総理の病篤い75年10月21日党中央によって提案され、翌22日毛主席の同意を得たものであった。会議ではさらに、呉徳副委員長が演説を行い、あらためて、「四人組」反党グループの陰謀活動の核心的問題は、毛主席が教えた「マルクス主義をやるのであって、修正主義をやってはならない、団結するのであって、分裂してはならない、公明正

大であって、権謀術数をめぐらしてはならない」という3つの基本原則に完全に背き、党と国家の最高指導権を乗っ取ろうとしたところにあるということを強調した。会議はさらに華総理の提案に基づき、喬冠華外交部長を解任し、黄華氏を後任に任命した。

12月の下旬は、中国共産党と中国の人民に、77年における雄大な闘争の方向を指し示すふたつのきわめて重要な政治的イベントに彩られた。ひとつは、12月26日毛主席の生誕83周年に当って、毛主席の輝しい著作「十大関係について」が、20年ぶりに全文公表されたことである。毛主席が56年4月25日、ソ連の経験戒めとして、中国の経験を総括し、社会主義革命と社会主義建設における十大関係について論じ、中国の状況に適合した、多く、はやく、立派に、むだなく社会主義を建設するという総路線の基本思想を提示したこの講話は、当面「四人組」が、たとえば物質と精神、実践と認識、政治と経済、生産力と生産関係、経済的基礎と上部構造などの関係について振りまいてきた形而上学のあやまった議論を批判するためのもっとも鋭い武器である。20年にわたる実践は、毛主席が確定した「国内国外のすべての積極的要素を動員して、社会主義事業に役立たせる」という基本方針が実行され、十大関係が正しく処理されたばあいには、社会主義の事業は前進し、さもないばあいには挫折したということを教えたのである。「十大関係について」の内容に関しては、さらに別の機会にふれる。

77年の戦闘任務の現在

今ひとつのイベントは、今までにもすでに何度か引いてきたが、12月10日から北京で開かれた「農業は大寨に学ぶ」第2回全国会議で、12月25日華主席がおこなった重要な講話である。講話のなかで華主席は、76年の戦闘の過程を回顧し、77年の戦闘任務を展望した。華主席は「四人組」との闘争について、「われわれはきびしい試練に打

ち勝った、毛主席の革命路線に導かれ、わが党は勝利した、プロレタリアートは勝利した、人民は勝利した、光明にみちた社会主義の中国は勝利した」と宣言した。同時に華主席は、この勝利がかちとられたことについての功績はあくまでも毛主席に帰すべきものだということをしみじみ述べた。前にもふれたように毛主席は、くりかえし「四人組」を批判し、かれらと闘争したばかりでなく、かれらの問題を解決するための周到な戦略的布石をおこない、人事面での効果的な処置をとったのである。

華主席はついで、77年の全党、全軍、全国各民族人民の主な戦闘任務を挙げた。第1は、いうまでもなく、「四人組」を摘発・批判する大衆運動を深化させることである。当面はかれらの権力奪取の陰謀を、ついでかれらの反革命の正体と醜悪な経歴を、さらにはかれらの反革命修正主義路線の極右の本質と諸方面におけるその現れを摘発・批判しなければならず、進んでは哲学、政治経済学、科学的社会主義の理論面から批判を加えなければならない。摘発・批判の闘争のなかでは、打撃面はあくまでも「四人組」とそのひと握りの血盟の徒に限らなければならない。そのほかのあれこれのあやまりを犯した人びとに対してはあくまでも教育することを重点としなければならない。

第2は、党建設を強化することである。「四人組」によってむしばまれた党の集中的統一指導の強化、党の民主集中制の強化、党のすぐれた作風の発揚を中心内容とするマルクス主義の思想教育運動を、全党で進めなければならない。華主席は、77年の適当な時期に、全党的範囲で整風・整党運動をおこなうことを明らかにした。

第3は、農業は大寨に学び、工業は大慶に学ぶ大衆運動を展開し、国民経済を発展させることである。華主席は、革命とは、生産力を解放することだということ、社会主義経済の発展に努力することは、プロレタリア独裁の基本的任務のひとつ

だということ、社会主義の方向を堅持し、プロレタリアートの政治による統率を堅持するという前提のもとでは、生産の発展は大きければ大きいほどよく、速ければ速いほどよいことを強調して、周総理が第4期人民代表大会でかさねて明らかにした毛主席の雄大な目標——今世紀中に、農業、工業、国防、科学技術の現代化を全面的に実現し、中国の国民経済を世界の前列に立たせる——をめざし、77年に取り組むべきいくつかの具体的な任務を明らかにした。

第4は、大衆的なマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作、毛主席の著作の学習運動をさらにあらたな高まりに導くことである。上にかかげた3つの任務を遂行するために、理論の学習をいちじるしく強化しなければならないことはいうまでもない。

華主席は最後に、「天下大いに乱れて、天下大いに治まるにいたる」という毛主席のことばをひき、党中央が全国人民の根本的利益と共通の願いにかなうものとして下した雄大な「戦略的決定」を、「ふたつの階級のはげしい闘争のなかで、安定と団結を実現し、プロレタリア独裁をうち固め、天下大いに治まるにいたる」という字句に定式化した上で、「われわれはかならず勝利しなければならない。われわれは必ず勝利することができる」という戦闘的な呼びかけを以て講話を結んだのである。

[パ ン フ]

「善隣学生会館事件」10周年特集

B 5 20 頁 300 円